

保育所における外国につながるのある子どもと保護者の支援

Supports for Children with Diverse Cultural Backgrounds and Their Guardians in Nursery Schools

○松島 京・松浦 崇・吉田晃高

○MATSUSHIMA Kyo, MATSUURA Takashi, YOSHIDA Akitaka

近大姫路大学

University of KinDAI Himeji

Key words: children with diverse cultural backgrounds, child care support, children's rights

研究の目的

本研究は、「外国につながるのある子ども」とその保護者に対する、保育所を中心とした地域における生活支援のシステムを構築するための方策を検討することを目的とする。本発表では、支援の際に保育所を中心とすることの意義について検討を行う。なお、本研究では、子どもが、外国人であることや外国籍であることだけに限らない、多様な背景を抱えていることを示すために、「外国につながるのある子ども」という表現を用いる。

研究の背景

1990年代以降、出入国管理及び難民認定法（入管法）の改正に伴い、日本に住む外国人は増え続けている。そのような状況の中で2000年頃から、多文化共生社会構築に向けての政策や研究が展開されてきた。近年では、外国人が生活上抱える問題とそれに対する生活保障の必要性がクローズアップされ、「生活者としての外国人」に関する総合的な対応策が検討されている。外国人の定住化とともに、外国につながるのある子どもも増加しており、日本の学校に適応できないことや不就学などが可視化し社会問題化してきている。

これまで、外国につながるのある子どもに対する教育については、「外国人児童・生徒の受け入れ体制」、「外国人児童・生徒の適応プロセス」「日本語教育と母語教育の重要性」「不就学をめぐる問題」「国際理解教育のあり方」というような課題の調査研究（宮島・太田 2005 など）が、保育については「保育の国際化」、「保育における多文化共生」「保育現場におけるニーズと対応」というような調査研究（日本保育協会 2009 など）が、それぞれ展開されてきた。いずれも、外国につながるのある子どもの増加と教育・保育現場での課題の多様化を背景として行われてきたものだとはいえる。また、教育・保育現場での課題が浮き彫りになるにつれ、外国につながるのある子どもの不就学等の問題は、学校という制度だけの問題ではなく、子どもとその家族のおかれている環境や、家族的な背景があること、そして、それに対しての支援が必要だという研究も展開されてきた。

研究の課題と考察

外国につながるのある子どもに関する教育・保育それぞれの分野における研究や実践は蓄積されてきているが、子どもの成長や発達連続性をふまえた長期的な支援のあり方や、保護者等家族も含めて支援することについての研究はまだ少ない。

発表者らは、外国につながるのある子どもの教育への権利を保障するには、家族への支援や地域における支援が重要であると考えている。それは、子どもが学校に安心して通い教育を受けるためには、その家族が生活上必要とする社会保障サービスを受けることができているかということや、就学前からの十分な情報提供等の支援が重要な意味を持つためである。また、幼少期の子どもの安定した養育環境、その中でも特に母語、母文化の保持は、思春期におけるアイデンティティの形成にも大きく影響することが指摘されている（中島 2010）。それは一家庭の自己責任としてではなく、地域がそのような環境づくりをすることが求められている。その環境づくりにおいて、児童福祉法や保育所保育指針の中でも保護者や家庭を支援することが求められている保育所は、重要な役割を果たし得る。

しかし、子どもの成長や発達連続性をふまえた長期的な支援、保護者等家族も含めた支援とは、外国につながるのある子どもに限ることではないだろう。外国につながるのある子どもと保護者の支援という課題は、保育と教育の接続とは何か、保育所における子育て支援とは何か、ということ浮き彫りにしたといえる。

本研究は、科研費基盤研究（C）（23530794）の助成を受けたものである。

参考文献

- 中島和子、2010、『マルチリンガル教育への招待 言語資源としての外国人・日本人年少者』ひつじ書房。
日本保育協会、2009、『保育の国際化に関する調査研究報告書 平成20年度』。
宮島喬・太田晴雄、2005、『外国人の子どもと日本の教育 不就学問題と多文化共生の課題』、東京大学出版会。